

---

# 天国へのラブレター

西沢恩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天国へのラブレター

### 【Nコード】

N3296D

### 【作者名】

西沢恩

### 【あらすじ】

就職活動に活路を見出せない私は気分転換に買い物に出かけた。店先で虹が出ていたので見た。すると虹が二つ、三つと分かれ始め、やがて千本の虹が天へと繋がった。階段を登っていってみると、そこには幼稚園時代、意識していた少年の姿があった。

## 第1話 冴えない私

年の瀬も押し迫った今日この頃、私は自己分析表の前に座っていた。机の上で、数々の文庫本、SPI対策本、面接対策本、ゼミの卒論ファイルがいびつなピラミッドを成していた。来年から就職活動…か。わかってますよ、やらなきゃならないってこと。けど、妙に気だるく過ぎてく今日この頃。この二十年ちよつとの人生、私は何をしてこれただろうか。小学校の頃は友達とよく遊んで、中学校の時は友達とよく喋っていたし、勉強も部活の吹奏楽もそれなりにがんばった。先輩に刺激されてめっちゃくちや練習したよな。高校では部活動に勉強にと忙しくて、一日一日を過ごすのが精一杯だった。大学では、オーケストラとゼミ研究。本が、音楽が恋人状態だった。

いいのかなあ、こんなんで。

自己分析表の前に並ぶとりとめのない文字達。はあ、と、小さなため息一つ。ええ、わかっていますよ、もう大人ですからね、次は社会人ですからね。と、誰ということもなく反抗して見せた。しかし空気に向かって喋りかけても、空気は何も返してはくれない。

冴えなく過ぎてく、私の一年。ああ、こんなことなら、もっとがんなればよかったかな？どうだったんだろう。私の二十年…。

「出かけよう…。」

そう呟いて私はファアのついた、いつもの黒いオーバーをはおり、マフラーを巻いた。玄関に下りて、デジタルオーディオプレイヤーのヘッドフォンを耳につけ、『サムソンとデリラよりバッカナル』を流す。中学時代、近くの中学校の吹奏楽部がこの曲で都道府県大会金賞を取った曲。よくこんなクラシックの難曲をこなしたものだ。それだけで尊敬に値する。しかし、私の街は伝統的に関西大会にも

ちよくちよく顔を出す地元では名門地区だ。クラシック曲をビシッとこなす中学生だって今も昔も珍しくない。

街を練り歩いた。年末という少し浮き足立った時期というのか、一戸建てやマンションがいびつに並ぶこの住宅街は静かだ。年末の寒風の中、アラビアンテイスト溢れるバツカナルが暑い空気を温度もなく連れてくる。年末のこの時期、イトヨーカ堂にでも顔を出せば、必ずベートーベンの第九が流れている。ベートーベンの生涯最高傑作は年末の顔として没後二百年以上経った今も色褪せていない。つくづく音楽の力って、偉大だ。そんな音楽に10年間魅せられた。しかし、自分の腕では最後まで名門地区に育ったクラブメートの背中は遠かった。

店の中には赤、青、オレンジ、緑、茶、黒。イロトリドリのフリースにシャツ、スラックスなどが今日も飾っている。つつい目を奪われていたら、

「ねえ、ママ。虹出てたね。」

「そうね、きれいだったね。」

という親子の何気ない会話が耳に入った。

虹…。

遙か昔のあることを思い起こしながら、私は外に出てみた。そこには見事なアーチを描いた七色の虹がそびえていた。

## 第2話 ふしぎな虹

霞がかつた曇り空に七色がぼんやりとではあるが、鮮やかな色彩を放っている。どのぐらい時間が経つただろうか。私は久しく見ていないな。と、しばし虹に見入っていた。しばらくしてからだった。わが目を疑うような、不思議なことが起こった。虹がぶくつと全体的に膨らんだように見えた。するとオレンジから赤、黄色からオレンジへと色が変わっていく。いや、色が変わったのではない。位置が明らかに変わったのだ。そして一番橋の赤はしっかりと一番外側にあつた。しかし、位置を変えている。さっきまでとは全く違う位置だ。もとあつた虹から脱皮するようにもう一本の虹ができあがっていく。

そして虹は、二本に分かれた。

私は一体何を見ていると言うのだろうか。虹が二本に分かれるなど、どんな本に書いてあつただろうか。誰が言つただろうか。目の前で起こっている事態についていけない私の頭は瞬く間にフリーズしたコンピューターのようになつてしまった。数学の公式も英文法も、今は何の役にも立たない。

しかも話はこれで終わらない。さらに虹は三本、四本と分かれ、どんどん分かれ、近づいてくる。遠くを見渡せば七色のアーチが延々と連なり、先日クリスマスを彩つたイルミネーション顔負けの美しさだ。その美しさをどう表現したらいいのか、実際見たものにかわからないとしか言いようがない。私は完全に心を奪われてしまい、導かれるように虹のアーチをくぐっていた。

それはまさに、夢を見ているようだった。足がふわふわとして、天にも舞い上がるような気分だった。これぞオーバー・ザ・レイン

ボー。夢心地。でもこれは幻ではないのか。そんな疑念など、すっかり取り払われていた。私は虹が見せた夢、幻に酔いしれていた。

だがそれは、夢でも、心が見せた幻などでも、なかった。

虹を超えていくうちに気づいたのだが、血の気が引くような状況に気がついた。

私は宙を歩いているのだ。

そんなはずがない！

どうして落ちないの！？

どうして普通に歩いてこられたの！？

誰かに見られてないの！？

途端に次の一步を踏み出すのが怖くなった。次の一步を踏み出せば、私は地面に真つ逆さまに落ちるのではないかと思ったからだ。実際ざつと見ても地上1キロメートルくらいあるんじゃないかという高さだ。こんなところから落ちたら当然木っ端微塵だ。私はキツと目を瞑り、その場に立ち竦んだ。何でこんなところに来たのだろう？こんな恐ろしい思いをするなら夢など見なければよかった。

これが夢なら今すぐに覚めて！

…大丈夫だよ。そのままこっちに上がってきてごらん。

父親のものとは違うが、ふつと優しい、温かい声が聞こえた気がした。聞いたことのない声だった。とりあえず、目を開けてみた。足元がキラキラ光っている。恐る恐る触ってみると、足元は確かに存在した。透明な、クリスタルの階段だった。下半身から力が抜け、私はその場にへたり込んだ。落ちない。この世のものところそ思えないが、地面は確かにあったのだ。触ってみると、確かにクリスタルだ。子供の頃、触ったことがあるから、なんとなくわかる。今は子供の頃のように、純粋な気持ちで見て、感じているほうがしっくりくるような、そんな気がしていた。しかしここからが大人になった

ものとしての性なのだろうか、はたまた人間としての性なのだろうか、となると一体この虹はどこに繋がっているのだろうか。一体この虹の先に何かあるのだろうか。と、つい勘ぐりたくなってしまふ。

私は一呼吸すると、前をじっと見据え、階段を一步、慎重に、慎重に踏み出した。

### 第3話 あ頃の思い出

二十代とは言え、まともに運動しているわけじゃないからさすがに何百段とある階段をひたすら登るのはきついものだ。息が切れ、カラカラに乾いているはずの服は汗で湿り気を帯び、ベトベトに濡れているはずの喉は乾燥を覚え始めた。

ちよつと、休憩するか。階段に腰をさつき買ったミネラルウォーターを口に含んだ。辺りを見渡してみる。住宅地は適当に並べて作ったモザイクのようで、形もいびつに、山に食い込んでいる。上空には厚い雲が低く垂れ込み、ふうと、深呼吸すると、地上とは違う、新鮮な空気が肺を満たした。

虹、ということ、思い出した。あれは、十五年前、卒園を控えた頃だった。あの日もこんな風に虹が出ていた頃だった。

「わあ、虹だ！」

「ホントだ、ホントだ！」

「せんせー！ にじにじ！」と、園児達のはしゃいでいるので、自分もつられて一緒に虹を追いかける。その時はもちろん一本だったけど、あの日もこんな風に、美しい虹がかかっていたっけ。

あの頃、ちよつと気になっていた男の子がいた。するとその子が私に声をかけてきた。

「ねえ、舞衣ちゃん。虹が写ってるよ。」

「そ、そうだね、きれいだね。」

「そうだね。ねえ、舞衣ちゃん、虹をいっぱい出すふしぎな宝石があるって、知ってる？」

「そんなのあるわけないじゃん！」

「どうして？」

「どうしてって、どうしても！」

「そうかなあ、わかんないよ。ひよつとしたら、どこかにあるかも

「しれないじゃん。」

「祐輝君ってふしぎなこと言うんだね。」

「ん、そう?」

今考えても、不思議な子だった。何本も虹が分かれるなんて、幼稚園の頃から絵空事だと思っていた。どう考えたってそんな石、あるわけない。まさか、その石があったというのだろうか。今、自分が置かれているこの状況を思うと、私はひどいことを言ってしまったものだ。と、ちくりと針を刺すような痛みが走った。

そう、あの子は、ああ、高月祐輝だったっけ? 不思議な子だった。だからこそ、子供心なりにひきつけてやまない子でもあった。

そんな、あの子と過ごした、十五年前の何気ないエピソード。

でも、三年前、すごくショックだった。

三年前の十一月、高月祐輝君は、喘息で亡くなった…。詳しい状況は聞いていないけど、突然発作が起こったらしい…。

あの子は、見つけたのかな? 虹を千本に分ける不思議な石を…。

## 第4話 初めての恋

さあ、あと一息！気合一発、頬を両手でパシッと鳴らした。上を見上げれば、後三十段ほど。

一段、

二段、

三段…

そして、

ようやく辿り着いた。そこは雲が低く垂れ込めていて、一歩先が見えないほど霞んでいる。辺りは白とコーラルピンクがマールを描きながら霞んでいる。足元を見れば水晶がキラキラと光っていて、水晶の下からルビー、サファイア、ターコイズ、宝石が敷き詰められている。こんなところを見つけたら今頃ぼろ儲けだろう。宝石を踏みしめているなんて、それだけでも自分の足が変になりそうだ。何段も、何段も階段を登ってきたのに、足の疲れが嘘のようだ。

虹の先はこんな風になっていたのか…。

「やっと来たんだね。」

声が出たので前を向いてみた。ぼんやりとした人影、こちらに来る、少しずつ見えてくる、高校生くらいの少年の姿。

「君は…？」

「憶えてない？祐輝だよ、高月祐輝。」

「祐…輝…、あ、ああ、祐輝君。久しぶりだね。」紛れもない、3年前亡くなった高月祐輝が、今、目の前にいる。これだけ不思議な

ことが立て続けに起これば、もう信じるのは自分の目だけだ。祐輝は今、目の前にいる。

「あのね、見つけたんだ、これ。」差し出した右手には握りこぶし大の見たこともない大きさのダイヤモンド。ダイヤモンドの中で虹色に光っていて、どんなブリリアントカットだってこの輝きは真似できないだろう。私が今まで見てきたダイヤモンドの中でも一番を争う大きさだ。

「すごい…！こんなに大きなダイヤモンド、初めて見た。」

「これが、虹を千本に分ける石さ。」

「え！？」

「憶えてない？どこかに虹を千本に分ける石があるかもしれないって言ったの。幼稚園の頃だったから憶えてないかもしれないけど。」

「そうだ。ついさっきまで記憶の片隅に追いやっていたことだった。千本に分かれた虹を越えながら思い出したのだ。」

「正直なところ、忘れてた。でも、虹を越えて歩いてきたら、次第に思い出したよ。」

「そっか、よかった。」祐輝は屈託のない笑顔を見せた。幼稚園時代の純粹さそのままだった。目の前にいる祐輝は幼い日に自分の知った、あの日の祐輝のまま、つられて口が緩む。

「君は変わってなかったんだね。」

「僕も諦めかけてはいたけど、こっちにきてから、見つかったんだ。幼稚園の頃、想像していた石が、本当にあつて…。一度だけ試してみたかったんだ。」

「それじゃあ、ここは…。」

「いわゆる天国、なのだろうか。しかし、それは喉を震えて出てこなかった。」

「たぶん、天国になるんだろうね。」

「そう、なんだ…。」私は少しうつむいた。どこを見てもキラキラと輝いていて、自分の見ている中では考えられない光景がそれとなく目に入る。私はあの時、虹を千本に分かつ石なんてあるはずない、

と、見てもいないのに言い放ってしまった。幼い心で、夢のないことを言い放ってしまった。ひどく後悔した。

「…ごめんね。」必死で喉を搾り出して、咳くように謝罪した。

「え…？」

「虹を千本に分かつ石なんてあるはずない、なんて、言って…ごめんね。」私は少しうつむいた。今思えばあの頃、なんてことを言ったのだろう。後悔の念ばかりが頭を、体を、心を支配していく。

そんな私の肩に添えられた、温かい手。

「ううん、いいよ。」と、一言添えて。そのままぎゅっと抱きしめてくれた。私も夢中で背中にしがみつく。温かな体温が心地よくて、心も、体も溶けてしまいそうだ。そして

二人の唇が触れ合う。

それが、

私の、

ファーストキス。

このままでいて。やめないで。自分のどこにそんな純粹さが、大胆さがあったのだろう。今考えてもただ、驚くばかりだった。

しかし、ついにキスは打ち切られた。

「ごめんね、話したいことはまだまだあるんだけど、もう時間なんだ。そろそろ戻らなきゃ。」

「え!？」私は突然打ち切られた楽しい時間に、絶望感がひしひしと押し寄せる。

「じゃあ、僕は戻るから…」

「あ、あの…！」衝動に駆られた私はさっき買ったメッセージカードを裏返して渡した。

それが、

私の、

真実ほんじつの気持ち。

戻る時は、一瞬だった。

## 最終話 空を見上げて

気づいた時にはもう、もとのイトーヨーカ堂の前だった。年末と  
言うことで買い込みに急ぐ人々とすれ違う、もとおりの日々、も  
とどおりの人々。空を歩いていたようにしか見えない私なのに、誰  
からも注目されない。みんないつも通り。さりげなく寄り添う老夫  
婦、はしゃぐ子ども達に注意を配りながらもほほえましく見守って  
いる母親、いつまでも楽しそうに話す中学生のグループ、カップル  
なにもかもいつも通り。

宙を歩いていたって言うのに、誰もなんとも思わないんだな。

少し安心したような、残念なような、複雑な気持ちを噛んでいた。

ふと、空を見上げてみると、あの虹も、今はもうない。もとお  
りの曇り空。雲間から太陽の光がこぼれ、帯を成している。

今まで見ていたのは夢だったのだろうか。しかし、封を切ったメ  
ッセージカードが夢じゃなかったことを物語っている。数えてみた  
ら一枚、なくなっていた、メッセージカード。

確かに、書いて、伝えたのだ。

「ありがとう、好きだよ。」

返事、もらうことなく戻ってきちゃったね。私は唇に手を当てて、  
小さく笑った。初めてキスした、あの感覚。体も、心も解けそうに  
なったあの感覚。化学式もSPIも役に立たないあの感覚。どうし  
て日本人はこの感覚を忘れてしまったのだろうか。それとも最初か  
らそんな習慣なかったのだろうか。一度したら忘れられないよ。夢  
のようで、何よりの真実…。そんな自然なことを教えてくれた、初  
めのキス。

今思うと、少し苦いけど…  
いい夢だったよ。

今なら胸張って言えるよ。  
これが、私の初恋、だと。

## 最終話 空を見上げて（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

前作は途中で挫折、断念してしまい、楽しみにされていた方、申し訳ありませんでした。

今回も一日で仕上げたため、短い上、文章も粗いのですが、少しでも純粋な世界を楽しんでいただければ幸いです。子供の頃見た中できれいだと思ったものの一つが虹だったので、そこから話を繋げて、このような作品になりました。

来年も皆さんに楽しんでいただけるような作品を心がけていきたいと思っていますので、みなさん、よいお年をお迎えください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3296d/>

---

天国へのラブレター

2010年10月8日15時54分発行